

ENGAWA

2012年度 第4号

学生が変わる！浜松の未来

目次

- ◆特集 新春特別対談
『NPOに、
今こそ、マネジメント力を』
ページ2、3

- ◆浜松市NPO法人
災害支援連携会議
設立記念講演会 開催
ページ4、5

- ◆エンガワトピックス
 - ◎夢創造人養成講座
新たな協働の担い手
ページ6
 - ◎ファシリテーター
養成セミナー開催
ページ7

- ◆Check!
ニコプロジェクトに学ぶ。
SNS活用で活動の輪を
広げてみませんか？
ページ8



■表紙のことば

この春、静岡文化芸術大学の学生による新たな挑戦が始まりました。彼らが立ち上げた『C O s（コース）』は、地域のNPOや企業と、文芸大の学生が協働するきっかけをつくる、まさに中間支援機関です。発足の背景には、地域や社会貢献活動に対して学生にもっと興味を持ってほしい、また学生の専門的技術や知識を地域のために活かしたいという思いがあります。具体的な活動の内容や範囲は煮つめている最中ですが、今後彼らが浜松を変える大きな力になっていくことでしょう。

地域を担うNPOに・・・

今こそ、マネジメント力を。

市民協働と企業CSRをテーマに、『NPO団体養成スキルアップセミナー』の第3回が開催されました。そこで、今回講師を務めていただいた東海大学文学部広報メディア学科の河井孝仁教授と、NPO法人 魅惑的倶楽部理事長の鈴木恵子さんに、企業とNPOのコラボレーションの今後について、意見を交わしていただきました。
(コーディネーターとして、浜松市市民協働センター川端が参加しました。)

『どういう“めがね”を常に持つのか。
それを意識しないと。』



NPOの思いを生かす

鈴木：私たちのNPO法人魅惑的倶楽部は、ある企業の常務が理事になっていただいて、いつも企業目線のアドバイスをもらっています。事業の企画提案をすると『それは（法人にとって）メリットがない。』の一言で、バッサリ切られることがありますね。

河井：メリットのないことはしない。その通りですね。

鈴木：今、私たちのNPOでは企業との協働で、ある商品の開発に取り組んでいるんですよ。

河井：うまくいけば、NPOと企業が強み・弱みを補い合って社会課題を解決していく良い事例になるでしょうね。社会のなかで見落とされているマーケットはたくさんありますから。

鈴木：そこはNPOの力が発揮できる部分ですね。

河井：ただそれを狙っていくには、“自分たちはこの分野のこれが解決できるんだ”っていうことを明確にしないと。それを考えずに動き出すと、あまりうまくいかないですね。

鈴木：つい思いばかりが先行してしまいがちですね。

河井：その思いをどうサステナブル（持続可能）にするのかってところを、中間支援としてフォローしていく必要があるでしょうね。

見極められる力

鈴木：活動していて思うことですが、良い素材はいろんなところに転がっているんですよ。ただ見落としているだけで。

河井：ほんとにそうですね。それを見極められる力があるかどうかってことなんです。当たり前だと思って見過ごしていく訳ですよ、普通は。それがあ程度の問題意識を持っていると見えてくるんですよ。どういう“めがね”を常に持つのか。何かをつくっていく、伝えていく、解決していく存在っていうのは、それを意識しないと。

◆NPO法人魅惑的倶楽部 (エキゾチッククラブ)

『心のユニバーサルデザインの社会を目指す』という理念のもと、知的障がいのある方への余暇支援や、エイズ・HIVの予防啓発をすすめるレッドリボンプロジェクトなどに取り組む。さらには中山間地域交流や中間支援にも携わり、現在は企業との協働で、浜松市市民協働センターの指定管理者を務めている。



『いいものは、いろんなところに転がっている。』

鈴木：中山間地域との交流の機会も多いですが、地域にいる人は、いいものがあるのに気づいていないことが多いですね。

河井：日常化してしまっているものを、いかにそれを非日常化するかっていうことですよ。よそ者が出てきて意味があるっていうのは非日常化効果ですね。生活者に寄り添っても、生活者になってはいけない。そういう意識がないと見つけられないですよ。

法人理念を“商品化”

川端：今日のお話を聞いて、プロデュースとマネジメントというこの2つの要素が、すごく重要だと感じたのですが。

河井：そうなんです。どうや

第三回 NPO団体養成 スキルアップセミナー開催

講師 東海大学文学部広報メディア学科
河井孝仁 教授

1月13日(日)

企業のCSRと
NPOの活動の
協働のヒントを探る

団体活動をより充実させ、協働のきっかけを見つけないという人のための講座『NPO団体養成スキルアップセミナー』第3回が開催されました。

東海大学の河井孝仁教授をお招きして、CSRとはなにか、NPOは社会、企業に対してなにができるのか、そして企業を巻き込むにはどうすればいいのか、などお話ししていただきました。

河井教授からは、『協働を実現するには、様々な団体を結び直し発火させる“地域職人”の存在が不可欠である』など、大変興味深いお話を聞くことができました。

参加者からは、『以前、企業へのアプローチに失敗し、協働につなげることができなかったが、今回の話を聞いて、企業側の思いなど知識を得ることができた。』

と感想が寄せられ、各団体の発展につながる講座となりました。



ったら新しい“価値”をつくれるのかを考えないと。それこそイノベーション（変革）なんかないですよ。新しいものをつくらうではなくて、なにか破壊できないかっていう発想をする。そうすると結果的に新しいものが生まれるし、極めて先進的な効果が得られる。

川端：そこにいる人たちも、モチベーションを高めながら活動できますよね。

河井：今日の講座のなかでお話した、万協製薬と相可高校の事例がそうです。本当に楽しんでやってますよ、子どもたちは。

川端：まさに、NPO法人の理念は商品、それをどう売っていくのかという意識を持てば、活動は続きますよね。

河井：おっしゃる通りです。

鈴木：NPOも企業も、その部分は変わらないですよ。

河井：あと、ひいては『自分をどう売るか』っていうことです。ソーシャルが当たり前になったなかで、企業や行政でも、個人が顔を出して仕事をすることが多くなっています。個人に責任を与える一方で、成功したら褒められる仕組みをつくるってことです。

行政は良きパートナー

鈴木：私たちがNPOを立ち上げて12年目になるんですが、最初は小さなNPOだったので、行政から補助金や緊急雇用をいただいて、背中を押してもらいました。いつまでもそれに頼っていたくないという思いはありますが、それがなければ、現在のように、法人として人を雇用するということには至らなかったと思います。これから大きくなろうとしている他のNPOも、ぜひ行政と良いパートナーになって、自立につながればと思います。

河井：そうですね。『役所から金をもらわないNPOがいいNPO』みたいな発想もありますが、僕はそうは思わないですね。行政が市民のために集めたお金をNPOや企業が活用して、民間にしかできないことをやる。そういう役割分担はおおいにアリだと思います。

鈴木：それでこそ良いサービスが提供できると思います。NPOは（各分野の）プロですから。その意味では、行政とNPOは対等ですよ。

まずは、できることから

鈴木：中間支援をしていて、最近は『課題解決のためにNPO法人を立ち上げたい！』という相談も増えてきたのですが。

河井：いきなりNPO法人を立ち上げたい、という場合は注意が必要です。まずはすでに活動している団体に関わってみる。それで自信がついたのなら、任意団体から始めてみるとか。最初はできることからですね。

川端：法人になった段階で、社会的責任が生まれますからね。

河井：問題は、法人を作ること自体が目的になってしまっているいけない。法人で“何を解決したいのか”そこを問わないといけないのではと思います。

<対談を終えて・・・>

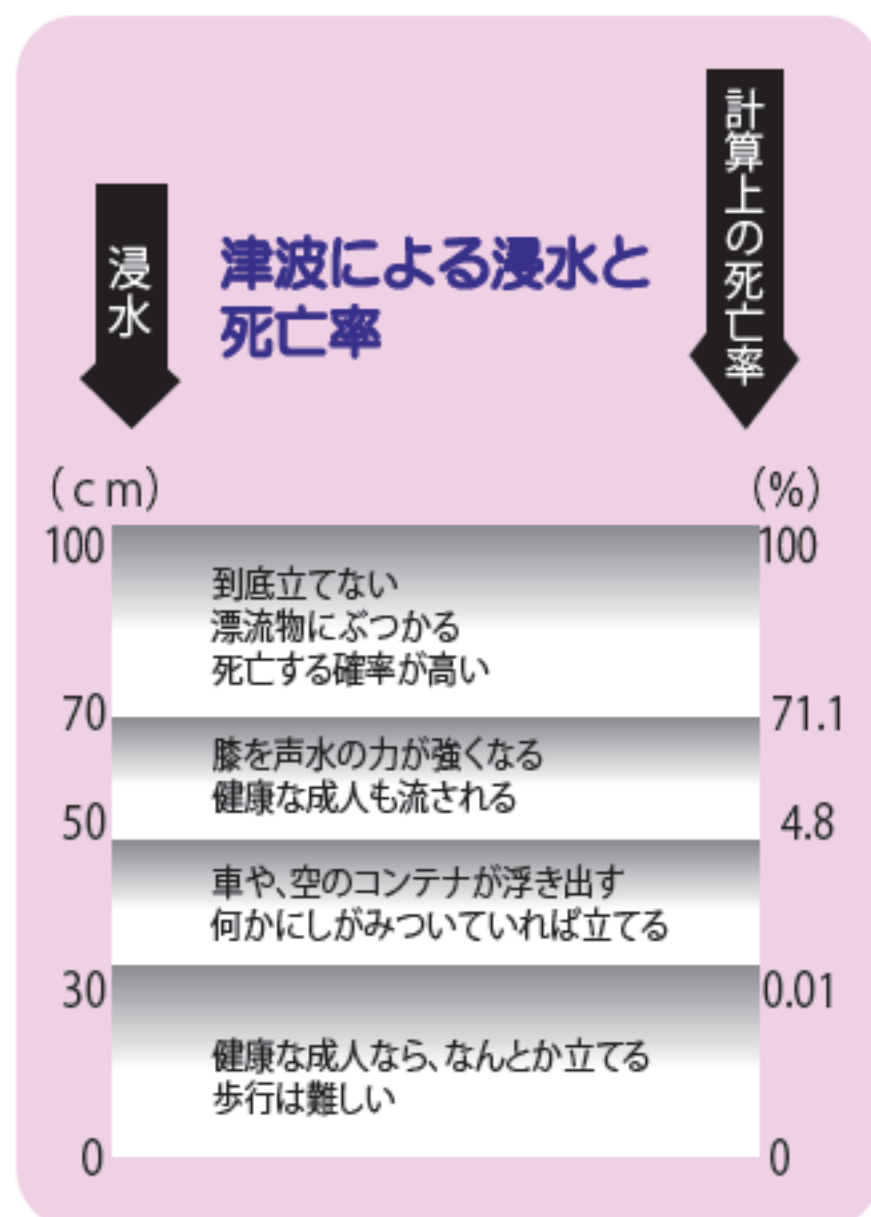
今回の対談では、NPO法人が今後どのように行政や企業と連携していくべきか。またNPO法人に今一番必要とされてる経営力について、より深い部分のお話が出たように思われます。皆さんの活動の参考になれば幸いです。



浜松市 NPO法人災害支援連携会議 設立記念講演会

～浜名湖・遠州灘における 地震災害に予想される津波被害～

「M9.0で、奥浜名湖に1m近い津波が」



津波被害研究の スペシャリスト

1月27日(日)「浜松市NPO法人災害支援連携会議 設立記念講演会」が開催されました。講師は名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻川崎浩司准教授。

先生は、特に、将来起こりうる東海・東南海・南海地震による津波被害、沿岸被害について、



様々な研究をされているスペシャリストで、一昨年の東日本大震災以降、全国的に防災・減災意識が高まる中、テレビをはじめとする数多くのメディアにも出演されています。

細江町の市民団体が共催

今回の「特別講演会」は、防災意識を広く市民に啓発する、活動の一環として、開催されました。

会場は今回の共催団体で、参画団体でもある「細江まちづくり協議会」と浜松市北区女性団体連絡協議会「きたっこ」の活動拠点北区細江町の、みをつくし文化センター。奥浜名湖地域の方々に、より高い防災意識をもって頂くための設定でした。

講演は、「浜名湖・遠州灘地域における地震災害に予想される津波被害」と題し、将来起こりうる東海・東南海・南海地震による津波被害、沿岸被害について、浜名湖内における津波のシミュレーション、その怖さも交えて話されました。300名を上回る参加者が、先生の詳細に渡る講演に、聞き入りました。

津波の怖さに、ため息

講演では、意外と知られていない津波の特性について話され例えば津波が沿岸部で9mの高さであった時には、その時速は36kmに達する。「津波と普通の波とは性質が全く異なる」「津波は水の塊が瞬間的に押し寄せる」「したがって、例えば、

浜松市NPO法人災害支援連携会議とは

市民協働の理念に基づき、地震等の災害発生時に、市内のNPO法人が連携し、行政の手が及びにくい被災地や被災者に対し、日ごろの活動実践から得た経験を生かし、それぞれの分野で臨機応変に活動する事、さらには市の防災計画などを深く認識し広く啓発することで、市民の防災意識を高めるために平成24年9月設立された組織です。

また、当会は設立と同時に、構成団体の活動が効果的に行われるために、浜松市との間に「NPO法人による災害時被災者支援に関する協定」を締結しました。

これにより、参加構成するNPO法人が「責任」と「自立心」を持って、減災や災害支援に取り組み、しいては市民の防災意識の向上につながる体制が整備されました。

平成25年3月現在、参加NPO法人等は11団体となっており、事務局である浜松市市民協働センターでは、より多くのNPO法人に参加を呼びかけています。

地震によって東海地方が 大きく被災するケース		避難の迅速化による被害の差	
		早期避難率が 低い場合	全員が発災後すぐに 避難を開始した場合
津波による 死傷者数	深夜	約224,000人	約85,000人
	昼間	約189,000人	約38,000人



いざという時のためにより高い防災意識を・・

1m近くの津波でも計算上での死亡率は100%に近くなってしまう。」との内容に、聴講者からは、ため息が漏れました。

また、東海・東南海・南海三連動型地震が起き、さらにマグニチュード9.0という想定での津波浸水は、海岸・河川の構造物が全壊となり、遠州灘・湖西市沿岸では8m近い津波が押し寄せる。奥浜名湖沿岸においても、地域的には1mを超える



津波が押し寄せるとい話しては、具体的な地名もあけて話されました。

“備え”の意識を

講演を聞かれた方たちからは「地震を視覚的にわかりやすく説明を頂いた。『地震は必ず起こる』とのことで、まだやっていない家内の対策をしなければならいと改めて感じました。」「津波を命に直結するものとして改めて考えることが出来てよかった。まず出来ることを備えとしてしておくことが大切と思った。自分の命をどう守るか常に考える生き方をしたい。」などの感想が多数寄せられました。



浜松市NPO法人災害支援連携会議では、今後も防災・減災に繋がる講座・講演を企画するとともに、それぞれのNPO法人が各分野で、広く防災・減災意識の向上のための活動を展開しようと考えています。この講演会は、その最初の取り組みとして大きな成果であったと、言えるのではないのでしょうか？

新たな協働コーディネーター誕生

夢創造人

DREAM CREATOR



昨年6月から浜名湖周辺を舞台に行なってきた、地域や団体などの間に立ち中間支援ができる人材を育てる夢創造人養成講座が今年1月、終了しました。今回は、講座の内容と修了式の様子をお伝えします。



浜名湖を知る

一昨年から毎年開催している夢創造人養成講座。初年度は、天竜区、昨年は北区引佐町を主なステージにして、地域が抱える課題や、その土地にある魅力を座学やフィールドワークの中からみつけ、団体間にたって中間支援ができる人材を育成しました。今年は、浜名湖を舞台にして地域に潜む、課題や魅力を全8回に渡り探りました。

参加者は、20代から70代まで幅広い年代が参加し、各所をまわりました。

講座の皮切りとなった西区弁天島では、実際に海に入り『海のゆりかご』と呼ばれる日本でも有数のあまも場を観察し、浜



名湖に住む生物の多様性を学びました。

また、庄内半島の先端に位置する村櫛町では、地元で活動するNPO法人むらちゃネットの取り組みを見学。むらちゃネットが管理する遊休農地に、館山寺サンビーチに大量に打ち上げられたあまもを肥料として畑にまき、この地域でかつて行われていた農法で野菜を育てることに挑戦しました。

フィールドワーク最終回の地域、舞阪では、舞阪宿案内人の会によって浜名湖周辺の歴史や文化の話を聞き、江戸時代には宿場町として栄え、今もところどころに当時の面影が残る舞阪の町を歩きました。

そして、新たな人材

講座を通して、今まで受講生の目から見た浜名湖地域の魅力的だった場所と、今後さらに発展していくために受講生が特に

関心を抱いた、舞阪と館山寺地域の魅力を高める斬新な提案も発表され、聴講した各地域の講師の方からも「面白いアイデアだ」と関心を寄せていました。

受講生の今後は、今回の講座を規定回数終了した者に与えられる、市民協働アドバイザーとして様々な活動に活躍していく予定です。

夢あふれる提案や活動を創造する人材として、地域へと羽ばたくことでしょう。



人材育成講座

ファシリテーター養成セミナーを開催！

「集団・人・自分を活かす」スキルを学ぼう

第1回講座 2月7日(木)

『ファシリテーション&ファシリテーターって何?』

第1回講座では、ファシリテーションの基礎について、浜松市市民協働サポートグループ代表の山内さんにお話しいただきました。会場は事前の予約で満席となり、講座開始前から、ファシリテーションに対する注目度の高さがうかがえました。

そもそもファシリテーターとは何なのか？山内さんによれば会議やまちづくりの企画などの

際に行われるワークショップにおいて、中立な立場で参加者の意見を引き出す人のこと。さらにそれらを整理し、メンバーで共有できるよう促すのがファシリテーターの役割だそうです。参加者は熱心にメモを取りながら、ファシリテーションのコツやワークショップの運営方法などについて学んでいました。

後半は、実際に簡単なワークショップを体験してもらいました。浜松の“いいね”と思うこと、“改善してほしい”と思うことについて意見を出し合ってもらい、グループの一人にファ



シリテーターを務めてもらいました。はじめて挑戦する人、スキルアップをはかる人と参加者のようすは様々でしたが、終了後には、『ファシリテーションの極意が聞けました』、『実際に体験をしながらだったので、刺激的だった』などの感想が寄せられました。第2回の実践講座を前に、ファシリテーションのおもしろさを感じてもらえたのではないかと思います。



第2回講座 2月14日(木)

『夜のアクト通りを活性化』

2回目の講座は、ファシリテーション技法を実際に体験し学びました。テーマを『夜のアクト通りの活性化』と仮定し、参加者を二つのグループに別けて、実際にアクト通りを歩き題材を探しました。参加者は、商業的・文化的の両面からの活性化を視野におき、アクト通りをどう活用するか？と考えながら、散策しました。

研修室に戻ってからは、前回の講座で学んだワークショップの技法を取り入れ、歩いて発想したことを付せん書きにしました。そして、各グループで書



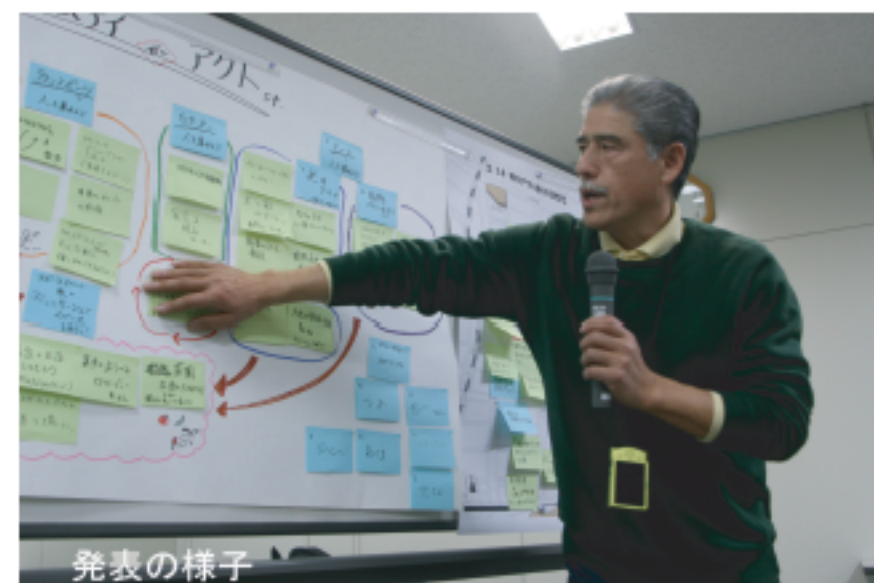
アクト通りを実際に歩いて題材を探し

記、ファシリテーター、発表者の役割を決め、ファシリテーター役が、出された意見をまとめながらワークショップを進めました。最後は、各グループごとに「夜のアクト通り活性化プラン」を発表しました。

講師の山内さんからは、「ファシリテーターとして大事なことは、意見を引き出しまとめることも重要だが、出てきた意見

を第三者に視覚的に“見せる”スキルも非常に大切」と、講義もあり、有意義な講座となりました。

今後、この講座で学んだ知識やスキルを活かし、さらなる団体の飛躍につながっていくことを、願ってやみません。



発表の様子

Check!



SNSで広がる！活動の輪

NICO PROJECT

－ NPO法人 障がい者就労支援協会 －

最近、市民活動の場でも利用されることが多くなったSNS。今回は、facebookを積極的に活用している、NPO法人 障がい者就労支援協会代表理事の船越貴久さんに、活用のヒントをお聞きました。



▼ニコプロジェクトとは

船越：障がい者就労支援協会が作業所と協力し、主に草取りや片付け作業、農作業などの仕事を受注して、障がい者の活躍の場を作り出しています。

▼facebook利用のきっかけと、その使い方は

船越：そもそもfacebookを始めたきっかけは『自分たちの活動を広く認知してもらい、活動の場を広げる』という目的に合っていたからです。法人設立と同時にfacebookページを立ち上げ、ユーザーがそのページに関心を持ったことを表す『いいね!』を1000集めることを目標にしてきました。

まずは利用する目的をはっきりさせるというのが、SNS活用の第一歩だと思います。はやっているからとりあえずやってみる、というのは失敗のもとですね。



▼facebookを利用して、一番役に立っていることは？

船越：“マーケティング”ですね。どのような投稿が多くの人々の共感を得ているのか、どのような表現が効果的なのか、など、閲覧した人の反応を分析して、それを会員への報告や、活動のPRに反映することができるのが、最大の強みです。自分がしたい表現と、相手に響く表現は違いますから、しっかりと分析を繰り返すことで、自己満足な使い方にならないよう、心がけています。

facebookの利用に限らず、対象の研究や分析が必要な人ほどそれに気づかず、従来のやり方を続けた結果、衰退してしまうケースは意外と多く見受けられます。SNSの利用方法と同時に活動内容も見直し、団体の活性化につなげてみてはいかがでしょうか。

ニコプロジェクトFacebookページ
<https://www.facebook.com/nicoproject>
ホームページ
<http://www.ryokuti.jp/nico.html>

発行 浜松市市民協働センター 〒430-0919 浜松市中区中央1丁目13-3

TEL 053-457-2616 FAX 053-457-2617

URL <http://www.machien-hamamatsu.jp/>

E-mail kyoudou@machien-hamamatsu.jp